



JAPAN FOUNDATION

小 田 原 文 化 財 団

2013年6月

杉本文楽

曾根崎心中

付き観音廻り

すぎもとぶんらく
そねざしんじゅう
つげたりかんのんめぐり



『杉本文楽 曾根崎心中付き観音廻り』

2013年ヨーロッパ公演

プレスリリース

独立行政法人 国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/>
公益財団法人小田原文化財団 <http://www.odawara-af.com/>

ごあいさつ

このたび、国際交流基金と小田原文化財団は、2013年9月～10月の1カ月間にわたり、人形浄瑠璃文楽「杉本文楽 曾根崎心中付り観音廻り」の欧州公演を実施いたします。

同作品は2011年8月に神奈川芸術劇場において初演され、好評を博したのは記憶に新しいところです。構成・演出・美術・映像は現代美術作家の杉本博司、作曲は人間国宝の鶴澤清治が手がけ、現在の文楽公演では演出の都合により一部が割愛され上演されている「曾根崎心中」を原文に忠実なまま舞台化し、多くの観客から熱い賞賛の声が寄せられました。そして2013年秋、いよいよヨーロッパでの公演が実現します。

今回のヨーロッパ公演は、「日本スペイン交流400周年」の記念事業としてマドリッドで幕を開けます。慶長遣欧使節が渡欧して日本とスペイン両国間のさまざまな交流がはじまってから400年となる記念の年に、マドリッドのエスパニョール劇場で上演されます。

マドリッドでの公演につづいて、海外初の日本文化会館として1962年に開館したローマ日本文化会館の開館50周年記念事業として公演を行います。会場は、ローマで最も格式の高い劇場のひとつであり、ロッシーニのオペラ「セビリアの理髪師」の初演の場所として世界的に知られるアルジェンティーナ劇場です。

そして最後に、世界的にも著名な舞台芸術の祭典であるパリのフェスティバル・ドートンヌの目玉公演のひとつとして、パリ市立劇場にて11公演を行います。

国際交流基金はこれまで、東京の本部と京都支部、ふたつの附属機関（日本語国際センター、関西国際センター）、および海外21カ国に開設された22の海外拠点を中心に、外部機関とも連携しつつ世界の全地域において国際文化交流事業を実施してきました。長年つちかかってきたこれらのネットワークを活かして、ヨーロッパの芸術文化の中心といえるこれら3つの都市の歴史と格式を誇る劇場において、創造的で優れた日本の舞台芸術を多くの人に見ていただくことができることを嬉しく存じます。

主催者

◎杉本文楽 ヨーロッパ公演概要

<公演巡回日程>

マドリッド公演：2013年9月27日（金）、28日（土）＊全2公演 会場：エスパニョール劇場

ローマ公演：2013年10月4日（金）、5日（土）＊全2公演 会場：アルジェンティーナ劇場

パリ公演：2013年10月10日（木）～19日（土）＊全11公演 会場：パリ市立劇場

主催：独立行政法人国際交流基金、公益財団法人小田原文化財団

企画制作：公益財団法人小田原文化財団

協力：公益財団法人文楽協会

独立行政法人日本芸術文化振興会（国立劇場・国立文楽劇場） <調整中>

後援：大阪府

大阪市

◎各地公演概要

1. マドリード公演

Sugimoto Bunraku: Sonezaki Shinju

(*Los amantes suicidas de Sonezaki*)

主催： 独立行政法人国際交流基金、公益財団法人小田原文化財団、エスパニョール劇場

共催： 在スペイン日本国大使館

協賛： 三菱商事、日本通運、Boucheron Paris、CoSTUME NATIONAL

会場： エスパニョール劇場（Calle Príncipe, 25. 28012 - Madrid）

【日本スペイン交流 400 周年記念事業】

◎エスパニョール劇場



© Sofia Menendez

マドリード中心部の広場に面して立地するマドリード市立の劇場。馬蹄形のクラシカルなプロセニウム劇場で、客席数は 740 席。劇場ディレクターはマドリード市舞台芸術総合ディレクターも務める **Natalio Grueso**。

◎ナタリオ・グルエソ(エスパニョール劇場ディレクター)

当エスパニョール劇場はマドリード中心地において 430 年間という長きにわたり存続してきており、国際的な舞台芸術の殿堂の一つとして知られております。我々の友人である国際交流基金との協力により、日西交流 400 周年の一環として杉本文楽をお迎えできることは、このように長い歴史を持つ当劇場としても非常に名誉のある出来事です。日本の伝統公演である文楽を現代美術作家、杉本博司氏が再解釈、再構成したという本公演は、まぎれもなく日本の舞台芸術の最先端をスペインに紹介することのできる唯一無二の機会となることでしょう。

ナタリオ・グルエソ

エスパニョール劇場ディレクター

兼マドリード市舞台芸術総合ディレクター

2. ローマ公演

SUGIMOTO BUNRAKU: SONEZAKI SHINJU

Doppio suicidio d'amore a Sonezaki

主催： 独立行政法人国際交流基金、公益財団法人小田原文化財団、Teatro di Roma

共催： 在イタリア日本国大使館

助成： 在イタリア日本商工会議所

協賛： チェスキーナ洋子、鈴木千寿、H.I.S.、株式会社フジテレビジョン、Alcantara S.p.A.、Mitsukoshi Italia S.p.A.、Bridgestone Technical Center Europe S.p.A.、株式会社資生堂、Alphanet s.r.l.、m&m medeiaservices s.r.l.、Miki Travel Agency Italia s.r.l.、Viajes Hanshin S.a.、YKK Mediterraneo S.p.A.、Boucheron Paris、CoSTUME NATIONAL
(以上、敬称略)

会場： アルジェンティーナ劇場 (Largo di Torre Argentina, 52, 00186 – Roma)

【ローマ日本文化会館開館 50 周年／慶長遣欧使節団 400 周年記念事業】

◎アルジェンティーナ劇場



©Mimmo Capone

1732 年に創立された、ローマにおけるイタリア演劇の実験と発展の歴史を証明する最も重要な劇場のひとつ。客席数は 680 席。劇場内部は何度かに渡る改装を経て、1993 年に現在の赤を基調とした内装になった。芸術監督は Gabriela Lavia。

◎ガブリエレ・ラヴィア (アルジェンティーナ劇場 芸術監督)

文楽とは何か、などと語ることはできないが、何度か東京でその舞台を観る機会に恵まれたことがある。そのときの大きな感動は、私にとって今でも忘れ難いものとして心に刻まれている。

その理由を考えてみた。文楽は人形劇の一種である。人形はかなり大きく、首(かしら)が人間の顔よりもわずかに小さい程度である。人形をあやつる様子は観客にも見える。すべてが見える。一体の人形を、首と右手をあやつる主遣い、左手をあやつる左遣い、そして両足を受け持つ足遣いの三名掛かりであやつる。何か特別な小道具が用いられる場合にはそれ以上の人形遣いが加わることもある。登場人物の声は舞台脇に居並ぶ太夫たちによって演じられ、三味線も観客に見える場所で演奏される。すべては分業で成り立っている。この事実こそ、西洋人としては「多様性の見事なまとまり」とでも名付けられそうなこの舞台芸術が、大きな感動を呼ぶ根源となっているのだ。この忘れ難い感動の記憶を胸に、来る 10 月、杉本博司氏による新演出の「杉本文楽 曾根崎心中」を当劇場において上演できることを非常に嬉しく思う。

ガブリエレ・ラヴィア
アルジェンティーナ劇場 芸術監督

3. パリ公演

Sugimoto Bunraku Sonezaki Shinju –

Double suicide à Sonezaki

d'après Chikamatsu Monzaemon

主催： 独立行政法人国際交流基金、公益財団法人小田原文化財団

協賛： Bouceron Paris、エルメス財団、笹川日仏財団、Fondation pour l'étude de la langue et de la civilisation japonaises sous l'égide de la Fondation de France、CoSTUME NATIONAL、株式会社資生堂

共同制作： パリ市立劇場、フェスティバル・ドートンヌ

アドバイザー： エマニュエル・ド・モンガゾン

会場： パリ市立劇場 (2, place du Châtelet Paris 75004)

◎フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ

1972年からパリで毎年9月から12月に開催される前衛芸術の祭典。舞台芸術界に新風を巻き起こすことを目的に、のちに文化大臣にもなったミシェル・ギギが創設。運営組織はNPOで、文化・コミュニケーション省、パリ市、イル・ド・フランス地方からの助成金と、企業や個人、会員からの寄付により運営されている。都市型フェスティバルとして、独自の劇場を持たず、市内各所の劇場と連携し、各劇場の観客層にあったプログラムを提案することで、フェスティバル側／劇場側ともにメリットのある協力関係を築いている。国内初演のオリジナル作品の紹介、実験的な作品や新しい才能の発掘、ヨーロッパや北米の文化機関とのコラボレーション作品の委嘱、非ヨーロッパ文化圏の主要な作品の紹介などをフェスティバルの柱としている。

◎パリ市立劇場



◎マリー・コラン (フェスティバル・ドートンヌ 芸術監督)

40年来フェスティバル・ドートンヌは音楽家、振付家、造形作家、劇作家、映画作家など日本のアーティストの方々を招聘してまいりました。

1978年パリ装飾美術館で開催された磯崎新の展覧会では、「間」というコンセプトを探求し、田中泯、鈴木忠志、武満徹、そして比叡山延暦寺の仏教僧の声明などを発見しました。

それ以降、毎年日本人アーティストに参加していただいておりますが、特に1997年の「フランスにおける日本年」ではパリが二国間の中心となり、才能あふれる輝かしいパフォーマンスが繰り広げられました。日本の

メセナ支援をいただき、フェスティバル・ドートンヌはパリ市内の 3 つの劇場で歌舞伎、能、文楽など日本伝統芸能を上演するとともに、作曲家・細川俊夫、造形作家・川俣正、振付家・勅使河原三郎など現代アーティストたちも参加し、カイエ・デュ・シネマと共同で大島渚監督の初のレトロスペクティブ上映会も行いました。日本の芸術家たちとの長きにわたる交流によって、フランス人は日本の革新的な作品に対する知識を深め、厚いファン層が生まれています。

今年 42 回目を迎えるフェスティバル・ドートンヌは、新たに日本をお迎えすることを非常にうれしく思います。今回は、16 年ぶりに人形浄瑠璃文楽「曾根崎心中」を上演いたします。この作品は杉本博司の演出により空間、照明を再考し映像を取り入れたもので、大夫、三味線、人形遣いの見事な演技を引き出します。また、ピエール・ベルジェ イヴ・サンローラン財団にて「加速する仏」展の開催も予定されており、杉本博司は 2013 年のフェスティバル・ドートンヌを代表する作家となることでしょう。

マリー・コラン

フェスティバル・ドートンヌ 芸術監督

<今後の日本公演の予定>

東京公演

2014 年 3 月 21 日(金)～23 日(日) 全 5 公演 予定

会場: 世田谷パブリックシアター 東京都世田谷区太子堂 4 丁目 1 番地 1 号

主催: 公益財団法人小田原文化財団

協力: 公益財団法人文楽協会

提携: 公益財団法人せたがや文化財団

世田谷パブリックシアター

後援: 大阪府

大阪市

東京都世田谷区

助成: アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

大阪公演

2014 年 3 月 29 日(土)～30 日(日) 全 4 公演 予定

会場: フェスティバルホール 大阪市北区中之島 2-3-18

主催: 公益財団法人小田原文化財団

協力: 公益財団法人文楽協会

特別後援: 大阪府

大阪市

<ご取材に関するお問合せ先>

TAIRAMASAKO PRESS OFFICE (担当: 平)

FAX: 03-3468-8367 e-mail: masako@tmpress.jp

* 国際交流基金 文化事業部 欧州・中東・アフリカチーム(担当: 北川)

Tel: 03-5369-6063 Fax: 03-5369-6038 email: Yoko_Kitagawa@jpf.go.jp

* 公益財団法人小田原文化財団 (担当: 稲益)

Tel: 090-2640-7905 Fax: 03-5422-9126 email: press@odawara-af.com

◎杉本文楽 公演作品概要

- ・公演タイトル 『杉本文楽 曾根崎心中 付り観音廻り』
- ・原作 近松門左衛門 『曾根崎心中付り観音廻り』
(岩波書店『新日本古典文學大系』より改訂)
- ・構成・演出・美術・映像 杉本博司
- ・作曲・演出 鶴澤清治
- ・振付 山村若
- ・映像 東芋、杉本博司
- ・出演者 鶴澤清治、吉田蓑助、桐竹勘十郎 ほか 24 名
- ・上演予定時間 145 分(休憩 20 分含む)

◎『曾根崎心中付り観音廻り』 作品解説

作者： 近松門左衛門

背景： 元禄16年(1703年)4月7日、醤油屋平野屋の手代徳兵衛と堂島新地の遊女お初が梅田曾根崎天神の森で心中をとげる。大坂中で話題となった事件から一ヶ月後、近松門左衛門はこの事件を『曾根崎心中付り観音廻り』として脚色、人形浄瑠璃の芝居に仕立て、大阪竹本座で上演。興行は空前の大成功で、当時竹本座の抱えていた借財を一挙に返済できるほどの集客を得た。なお、『曾根崎心中』は、世上の出来事を作品化した「世話物」と呼ばれるジャンルの記念すべき第一作として文楽史上に残る名作となっている。



天満屋の段 © Odawara Art Foundation



道行 © Odawara Art Foundation

◎出演者一覧

<太 夫>

竹本津駒大夫
竹本文字久大夫
豊竹呂勢大夫
豊竹靖大夫

<三味線>

鶴澤清治
鶴澤清介
鶴澤藤蔵
鶴澤清志郎
鶴澤清尙

<人 形>

吉田箆助(パリのみ)
桐竹勘十郎
吉田箆二郎
吉田勘彌
吉田幸助
吉田清五郎
吉田箆一郎
吉田勘市
吉田一輔
桐竹紋秀
吉田玉勢
吉田箆紫郎
吉田箆次
桐竹勘次郎
桐竹勘介
吉田箆之

<お囃子>

望月太明之
藤舎次生

◎制作意図

杉本博司

我が国においてエロスの問題、つまり色恋沙汰は、詩的関心事ではあっても、長らく宗教的な関心事ではなかった。しかし恋を心中によって成就させることによって、二人の魂が浄土へと導かれるという革命的な解釈が、はじめて近松門左衛門によって披露されたのが、この人形浄瑠璃『曾根崎心中』である。

「恋を菩提の橋となし」と語られる第一段の「観音廻り」には、死に行くお初が、実は観音信仰に深く帰依していたことが伏線として語られる。初演当時、封建道徳に深く縛られていた恋する若い男女に、心中は爆発的に流行した。この世で遂げられぬ恋は、あの世で成就される、と思わせる力がこの浄瑠璃にはあった。江戸幕府は享保8年(1723)、「曾根崎心中」を上演禁止とし、死者の葬儀も禁止した。葬儀禁止は成仏妨害策である。それから232年後の昭和30年になって、この浄瑠璃はようやく復活される。しかしその数百年の断絶のうちに、我々は近松時代の語りや人形の遣い方がどのようなようであったか、という記憶をほとんど失ってしまった。ただ残されているのは近松の浄瑠璃本と、人形遣い辰松八郎兵衛の出遣い図のみである。

私は今のこの世にあって、私の想像力を飛翔させ、古典の復活こそが最も現代的であるような演劇空間を試みてみたいと思った。そして行き詰まりつつある現代がそれを求めているような気がする。西洋におけるエロスの悲劇は、近松に先駆けてシェークスピアが「ロミオとジュリエット」で、近松に続いてゲーテが「若きウェルテルの悩み」として書き継がれている。エロスと死のテーマは洋の東西を問わず生まれ、今に至っている。

<杉本博司 プロフィール>

1948年東京生まれ。立教大学卒業後、1970年に渡米、1974年よりニューヨーク在住。徹底的にコンセプトを練り上げ、精緻な技術によって表現される銀塩写真作品は世界中の美術館に収蔵されている。近年は執筆、設計へも活動の幅を広げ、2008年建築設計事務所「新素材研究所」を設立し、IZU PHOTO MUSEUM(静岡県長泉町)の内装設計他、2013年4月4日にはエントランススペースのデザインを手がけた oak omotesando(表参道)がオープン。主な著書に『空間感』(マガジンハウス)、『苔のむすまで』『現な像』『アートの起源』(新潮社)。内外の古美術、伝統芸能に対する造詣も深く、演出を手がけた2011年の三番叟公演『神秘域』は2013年3月にNYグッゲンハイム美術館にて再演。4月には日本凱旋公演も行われた。1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞、2010年秋の紫綬褒章を受章。

◎みどころ

1. 現代美術作家・杉本博司がおくる「人形浄瑠璃」の世界

「能」を作品化するなど、近年伝統芸能に意欲的に取り組んできた杉本博司が新たに挑んだのは「人形浄瑠璃文楽」。江戸・元禄時代の近松門左衛門の代表作『曾根崎心中付り観音廻り』に独自の解釈を加え、構成・演出・美術・映像を手掛けます。

2. 『曾根崎心中』の原文が復活

現在、人形浄瑠璃文楽の公演演目『曾根崎心中』（現行曲）は、演出の都合上、原文の一部が割愛されたものになっています。『杉本文楽 曾根崎心中』では、原文に忠実な舞台化をめざすために、上演台本には、2008年に富山県黒部で発見された初版完全本（通称：黒部本）を原典として使用、原文にある「観音廻り」を見事に復活させました。

1703年の初演作品が現代によみがえります。



黒部本

3. 鶴澤清治（三味線）・吉田簗助（人形）と現代美術作家・杉本博司との夢の共演

杉本博司のコンセプトに賛同した鶴澤清治（人間国宝）、吉田簗助（人間国宝）が、近松の完全版ともいえる『杉本文楽 曾根崎心中』を共作。誰も観たことのない「文楽」に挑み、新たな魅力を繰り広げます。

4. 「観音廻り」で桐竹勘十郎が一人遣いを復活

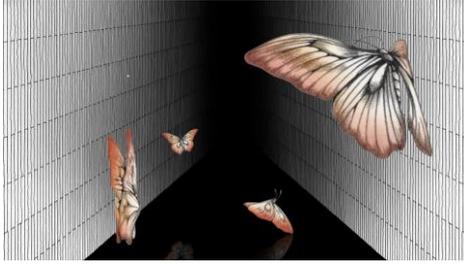
『曾根崎心中』の初演時（江戸・元禄時代）、人形の操作方法は現在の「三人遣い」と違って「一人遣い」によるものでした。本公演で復活する「観音廻り」において、桐竹勘十郎が一人遣いに挑戦。主人公である「お初」の一人遣い人形を新たに制作し、これに挑みます。なお、人形制作にあたっては、フランスを代表するメゾン、エルメスのご協力により、スカーフを用いたコンテンポラリーな衣裳が実現いたしました。



「観音廻り」 © Odawara Art Foundation

5. 「観音廻り」では、現代美術作家・東芋の映像作品がスクリーンに登場

伝統芸能と現代美術が見事に融合。桐竹勘十郎が操る一人遣いの「お初」の舞（「観音廻り」）の背景には、東芋のオリジナル映像作品が華を添えます。



© Tabaimo/ Courtesy of Gallery Koyanagi

<東芋プロフィール>

1975年兵庫生まれ。99年、大学の卒業制作として制作したアニメーションによる映像インスタレーション《にっぽんの台所》が、キリンコンテンポラリー・アワード 1999 最優秀作品賞を受賞。01年第1回横浜トリエンナーレで最年少の作家として出品。以後、02年サンパウロ・ビエンナーレ、06年シドニー・ビエンナーレ、11年、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家になるなど数々の国際展やグループ展で活躍。今もっとも注目を集めている映像インスタレーション作家。主な個展として、06年「ヨロヨロン」、原美術館（東京）、「TABAIMO」、カルティエ現代美術財団（09-10年「断面の世代」、横浜美術館（神奈川）／国立国際美術館（大阪）開催。14年 MCA シドニーで大規模個展予定。

◎国際交流基金 組織概要

国際交流基金は、世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する組織として、1972年10月に特殊法人として設立され、2003年10月に外務省所管の独立行政法人となりました。現在、本部と京都支部、ふたつの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、および海外21カ国に開設された22の海外拠点を中心に、外部団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を3本の柱として活動しています。政府出資金(780億円)を財政的基盤とし、この出資金の運用益、政府からの運営費交付金および民間からの寄附金などにより運営しています。

ウェブサイト:<http://www.jpf.go.jp/j/index.html>

○主な活動

文化芸術交流

言語の違いを超えた感動は、日本への興味と共感を生み、理解を促す源泉となります。国際交流基金は、そのような源泉を生み出す場の提供をめざし、美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、各分野のネットワークづくりを支援しています。

海外における日本語教育

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや理解を世界に広げていくことにつながります。国際交流基金は日本語教育が世界で活発に行われるよう、全世界規模での日本語能力試験(JLPT)の実施や教材開発、海外日本語講座の展開、日本語教育の専門家の海外への派遣、海外で教える教師の国内研修など、さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

日本研究・知的交流

海外での日本研究を支援すること、遠い国の社会や文化への理解を日本のなかで広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

○沿革

- 1972年 国際交流基金(The Japan Foundation)設立
- 1989年 日本語国際センター(埼玉県)設置
- 1991年 日米センター(Center for Global Partnership)設置
- 1997年 関西国際センター(大阪府)設置
- 2003年 独立行政法人国際交流基金となる
- 2006年 日中交流センター設置

本部所在地:〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

代表者:理事長 安藤裕康

国際交流基金に関するお問い合わせ先:

文化事業部 欧州・中東・アフリカチーム 担当:北川 Tel:03-5369-6063

メール:Yoko_Kitagawa@jpf.go.jp

◎公益財団法人小田原文化財団 概要

公益財団法人小田原文化財団はファウンダー杉本博司により平成21年12月22日に財団法人として設立され、平成23年4月1日に公益財団法人の認定を得ました。

○設立趣旨

古代から現代にわたる美術および演劇を軸にその伝承、研究、普及を図り、時代やジャンルを超えた芸術文化の振興活動を通じ、世界的な視野にたつて我が国の文化の向上に寄与することを目的として設立されました。

○主な活動

伝統芸能の再考を試み、古典芸能から現代演劇までの企画、制作、公演を行い、また既成の価値観にとらわれずに収集かつ拾集された「杉本コレクション」の保存および公開展示を通して、日本文化を広い視野で次世代へ継承する活動を行います。活動拠点として、現在小田原市江の浦に舞台、作品展示室、茶室などを配した芸術文化施設を建築中。



三番叟「神秘域」より © Odawara Art Foundation

○芸術文化施設予定地

神奈川県小田原市江の浦362

○東京事務所

〒108-0072

東京都港区白金 3-1-15 5階 TEL.03-3473-5235

○事務局

代表理事	小柳敦子
事務局長	杉本誠三
プロデューサー	足立 寛
広報	稲益智恵子

小田原文化財団に関するお問合せ先:

小田原文化財団 広報 稲益 090-2640-7905 email: press@odawara-af.com